

中国朝鮮族の由来

一、中国朝鮮族の起源

中国には約 200 万名の朝鮮族が生活している。その中国朝鮮族が、なぜ中国に移住し、どのようにして定着したのか。なかには、遼寧省朴家村と河北省朴杖子の朝鮮族のように、17 世紀初頭から中国に住み着いている朝鮮族もいるが、ここで扱う中国朝鮮族とは関係がない。彼らは朝鮮語も朝鮮の風習も失っている。

直接、今の朝鮮族に繋がる人々は、19 世紀中頃から中国に渡ってきた。そして徐々に移住者が増え、居住区を作るようになった。そこに「中国朝鮮族」としての近代的民族意識が芽生えたのである。

朝鮮人は、17 世紀の清建国の頃には鴨緑江、豆満江を渡って満州に移住して農耕をしていた(註：豆満江、鴨緑江南岸が朝鮮の領域になったのは、14 世紀。確定したのは 15 世紀。女真人の地域であったが、15 世紀に南から朝鮮人を大量に移民させた)。しかし、清政府は、1677 年、鴨緑江、豆満江の北岸一体と、間島地域に封禁令(立入禁止令)を出し、朝鮮族の流入を禁じた。朝鮮でも違法に川を越えた者を「越江罪」として処罰した。しかし、飢えに苦しんでいた朝鮮北部地域の朝鮮人の越境を防ぐことは出来なかった。

当時、延辺地区は間島と呼ばれたが、間島は「サイソム」に由来する。川を渡ることは禁止されていたが、人々は豆満江の中にある「サイソム(中間の島)」に行くといい訳をして、密かに川を渡り、空いている土地で農作業を行った。狭くてたいへん痩せた朝鮮の土地と、常習的な飢饉に耐えきれずに、命をかけて川を渡ったのだ。川さえ越えて満州に来れば土地も豊かだったからである。最初のうちは、朝、川を渡り、夜に戻る生活をしていたが、そのうち春に間島に来て、秋に収穫をしてから朝鮮に戻る者も現れた。彼等にとって、「サイソム(吉林省龍井市開山屯光昭村)」豆満江を渡ることの暗号であったのだ。このようにして、1907 年に延吉県の朝鮮人は 5 万名にもなり、1916 年には 20 万名になった。

二、朝鮮族の歴史

1644 年、清軍は山海関を超えて都を北京に定め、東北にいた満州族の大部分は山海関の向こうに移っていった。結果として東北の人口は大幅に減った。特に 1650 年頃から 1874 年まで、清は長白山地区を「祖先の発祥地」として封禁(立入禁止)した。

だが、この封禁政策は東北辺境を荒廃させ、重大な国境危機を招いた。特に 19 世紀中頃に英、米、仏が南から進出し、ロシアも北から進出してきた。それゆえ 200 年余り続いた封禁は廃止され、ロシアと隣接する延辺は、国防の重点となった。

1880 年、清は国境事務と開墾を担当する「三辺督軍」を任命し、山東省などから農民を募集して、荒蕪地を開墾させようとした。しかし、遠隔地であることや、交通の不便さのために、大きな効果は見られなかった。

このとき、朝鮮移民は許されていなかったが、移民を受け入れる前提は形成されていた。

すでに、15 世紀に中葉から、豆満江兩岸の人々は互いに往来していたが、清の「封禁政策」によって、豆満江以北への立入は禁止された。だが、貧窮に苦しめられた朝鮮北部の農民らが、生きるために両国の法に反して不法に越境して、隠れて定住生活をしていた。特に 1860 年代末以降に続いた朝鮮の自然災害によって、朝鮮北部の罹災民は、先を争っ

て鴨緑江と豆満江を超えた。

清は名目上は朝鮮人の越境を取り締まり、送還していたが、実質は越境を黙認していた。むしろ歓迎していたのである。朝鮮移民を利用して延辺を開墾しようとしたからである。

1882年、清は朝鮮罹災民の荒蕪地開墾を許可した。1883年には、清朝間に「吉林朝鮮商民貿易地方章程」が締結され、朝鮮との貿易が始まった。

1885年、清は「封禁令」を廃止したが、すでに1883年に清は豆満江以北の長さ700里、幅50里の範囲を、朝鮮移住民の「専門開墾地域」とした。

このころ、大量の土地を手にした地方官吏、地主らは、大量の朝鮮移住民を引き入れた。長いこと貧窮に苦しめられてきた朝鮮の貧困の農民たちは、大挙して川を越えて荒蕪地開墾に関わった。これによって多くの荒蕪地が肥沃な大地に変わり、穀物の収穫高も増加し、多くの道路、駅、市街地、村落が建設された。

しかし、朝鮮移住民の生活は、順調とは言えなかった。多くの人々が身1つで渡ってきたからだ。また、清の「弁髪、胡服」政策も受け入れて、髪を切らず、胡服を着なければ、土地を奪われることもあった。だが、朝鮮移民は前人未踏の草地、林地や泥沼を開墾して肥沃な土地に変え、田を開墾し、氷の浮かぶ川の中に入って堰を築き、溝を掘った。こうして、草地や湿地を美田に変えた。延辺での水田開発は1900年から始まったという。清末期や中華民国初期には官僚による抑圧、略奪や厳しい税金が課されたが、これに対する反対闘争も起きている。

1905年、日本は日露戦争後、南満州に勢力を広げたが、延辺にも勢力を伸ばしてきた。1907年日本は「韓国統監府間島派出所」を設置した。彼等は公然と「間島問題」に関する国境事件を作り上げて延辺に駐屯した。名目は「間島」の朝鮮人の生命財産の保護であった。そして親日組織である日進会の会員を利用して思うままに活動した。

1905年、龍井の「瑞甸書塾」創立以来、反日闘争が始まった。多くの反日団体が組織され、1919年には「3.13」反日デモ運動が行われた。鳳梧洞、青山里戦闘は、朝鮮族の歴史だけでなく、延辺、ひいては中国東北の抗日闘争史にも特筆されるべき事件であった。

1926年9月に朝鮮共産党満州総局東満区域局が龍井に組織され、延辺各地で闘争を繰り広げた。これに対して、日本は数回にわたる「間島共産党事件」をおこして、多くの共産主義者を逮捕した。

1928年2月、延辺に最初の中国共産党組織である中共龍井村支部が建立された。1931年の柳条湖事件をきっかけに、日本は全東北を占領したが、延辺では様々な反日闘争が行われた。このような闘争は1945年の光復まで絶えなかった。

生きる場所を探して、移民としてこの地に来た我が民族は、波乱多い曲折を経ながら抗日戦争、解放戦争(国共内戦)で輝かしい功勳を打ち立てた民族である。

中華人民共和国成立とともに延辺朝鮮族自治州が成立し、朝鮮族は中国という大家庭の1つの少数民族として認定され、他の民族と共に同等の権利をもつようになった。そして、社会主義の建設、特に改革開放以降、中国大地の所々で光を注いでいる。

(パク・ヨンイル 中国朝鮮族の由来より要約)